

兒玉善仁著

イタリアの中世大学

—その成立と変容—

大学の「改革」は今日、全世界的に課題とされている。主要先進国の大學生が大衆化の時代を迎えて久しく、日本では全人時代と言われる現象も生じている。とはいへ、その誕生以来、大学とは絶えず変化し続ける組織でもあつた。中世のヨーロッパに初めて「大学」という組織が誕生した當時、そこで学んでいた人々は、現代におけるよりもいつそうの多様性を帶びた集団だったといえる。貴族出身の遊蕩学生がいれば、その使い走りをして生活費を稼ぐ苦学生もある。いまだラテン語のおぼつかぬ青年から、既に一定の地位を得て居る壮年の留学生まで、年齢層も様々である。またその出身地は、キリスト教界全域に及んでいたほか、彼らはしばしば大学から大学へと遍歴し、方々で乱痴気騒ぎを繰り広げる一方、

そのものの成立過程と、その機能の変遷が論じられる。以下に、本書の内容を紹介したい。

序章と終章のほか一四章からなる本書は、全五部に分けられている。

第一部 ボローニャ法科大学の成立と組

緯構造 第Ⅱ部 法学学位の普遍性 第Ⅲ部 「医学部」の成立と組織の変容 第Ⅳ部 医学の教育制度化と学位の意義 第V部 パドヴァ大学の地方性と普遍性 この構成からも分かるとおり、第Ⅰ部から第Ⅳ部までの著者の問題関心は大きく二点に集約される。すなわち、大学という教育機関を形成するに至った複数の人的組織の成り立ちと、そこで授与される学位が意味するものである。前者については法制的

観点を取り入れつつ、なぜボローニャの法科大学団は、パリなどとは異なり、もっぱら学生のみによつて構成され、教師を排除した团体であつたのか、といった根源的な問題に解が与えられていく。後者については学位の実効性の根拠が何によつてもたらされ、その内実がどのように変化していくか、という問題が、法学と医学の学位を対象としてそれぞれ考察されている。いすれも一組織の制度的変遷を個別に追うだけではなく、他都市の大学団や職業組合との関係までも視野に入れ、それらが相互に影響しつつ変容する過程が明らかにされる。

中世大学の制度化とは、もともと固有の校舎さえ持たなかつた大学団が、普遍権力や各コムーネの後援のもと、それらの教育政策や行政制度に取り込まれてゆく過程であるといえる。しかし、そうした関係が必ずしも大学の国際性の喪失に至らなかつた例として、第V部において焦点をあてられるのが、一五世紀初頭以来ヴェネツィア共和国の支配下に入つたパドヴァ大学である。富裕層は法学、貧困層は神学といったように、同大学は社会階層に応じて必要と考へられた学問を提供し、かつ経済的利益を生

期から中世末期までを中心、大学の起源や機能という根本的な問題を論じ、さらに近世以降の展望に関しても極めて示唆に富む内容となっている。地域と時代を超えて伝播し、絶えず変化を経験しつつ今日なお存続する大学という組織、また教育史のみにとどまらない「知の歴史」に興味を持たれている方にも是非一読をお勧めしたい（A5判 三八五七〇頁 二〇〇七年二月  
名古屋大学出版会 税別七六〇円）  
(中田惠理子 京都大学大学院文学研究科修士課程)

空中写真、景観写真等が多用されていることである。地図解説とフィールドワークをセットとして都市空間に切り込むアプローチの有効性を、地理学の研究者や学生たちだけでなく、広く一般の読者にも示そうとする筆者たちの意図は明確である。加えて、新聞、自伝、文学等を豊富に引用し、都市空間にかかる記述や言説、表象のされ方から、人々が都市空間をどのように消費したかを明らかにしようとしている点にも特色がある。

水内俊雄・加藤政洋・大城直樹著  
『モダン都市の系譜』

—地図から読み解く社会と空間—

さて欧米における大学史研究は一九世紀にさかのばる伝統を有しているが、近年はジヤック・ヴエルジエ「ヨーロッパ中世末期の学識者」(野口洋二訳、創文社、二〇〇五年)のように、教育史・学校史の枠にとどまらず、文化や社会、政治といった広い文脈との関わりの中で教育や知識人の展開を明らかにする研究が増加してきたように思われる。わが国における中世大学史研究もまた大きな発展の兆しを示している。単著として読めるものには、フランス・パリ大学の諸相を扱った田中峰雄「知の運動」(ミネルヴァ書房、一九九五年)、広くドイツ全体を対象とする平野一郎「中世末期ドイツ大学成立史研究」(名古屋外国語大学、二〇〇一年)等がある。本書は地域として初めにイタリアを専門的に取り扱つた研究書であり、時代としては大学草創

本書は、大阪・京都・神戸を中心とする京阪神地域の諸都市を対象に、前近代から今日までの都市形成の諸過程におけるさまざまな局面で、どのように政治力学が作用しながら都市空間が構築されてきたか、その諸相を具体的に提示しようとするものである。大きな特徴は、さまざまなスケール

出現し、インナーリングが形成された。この地域は、その後の都市空間形成の主要な舞台である一方で、前近代の都市空間の特質をさまざまに反映する地でもあったことが指摘されている。

市空間が出現したことを取り上げている。

郊外住宅地は、民営鉄道会社が郊外生活と新しいライフスタイルを提案し、都市と近郊を結ぶ路線を敷設するという、ソフトとハードの戦略を通じて実現した。商店街を盛り場へと変えた要因の一つは、ウンドウショッピングや街歩きの楽しみといふ都市空間の消費スタイルの変化であったと論じられている。この時期の急速な都市膨張と都市社会の変容に対応するため、一九一九年の都市計画法公布以後、都市計画と社会調査・社会政策とが並行して推進されてゆく。

第三部「戦災と復興」では、戦時中から戦争直後の時期に実施された一連の都市政策について述べている。都市計画と土木の官僚の主導で新興工業都市計画が進められ、土地区画整理事業が実施される一方、軍需工場や軍施設の立地で発生した大量の住宅需要をまかなうために住宅官団が設立される。戦時下の建築限界による破壊、さらに、戦後の都市区画整理事業実施といふプロセスのなかで、多くの都市は急速な復興を果たしたが、都市の景観に歴史的な要素が失われ、画一化する結果にもなった。

### うと想像する。

(A5版 三三五頁 一〇〇八年五月)

ナカニシヤ出版 税別一八〇〇円

(田中和子 京都大学大学院文学研究科)

### 受贈誌

(一〇〇八年一〇月一〇日)  
一〇〇八年一〇月三三日)

アジア研究所所報（亞細亞大学アジア研究所）一三二

社会経済史学（社会経済史学会）七四一

オリエント（日本オリエント学会）五一一

一橋研究（一橋大学大学院一橋研究掲載委員会）三三一一（通巻一六〇）

人文地理（人文地理学会）六〇一四

哲學研究（京都哲學會）五八六

日本史研究（日本史研究会）五五四

撰大人文学科（撰南大学外國語学部）一六

日本研究（国際日本文化研究センター）三

### 編集後記

九二卷二号をお届けします。本号に掲載されました九本の論考の内容にかかわります

キーワードを順に並べますと、モノの変遷と社会の性格、政治・統治における言説、政治議論の組織化、戦争・支配と経済・通貨、法体系、シティズンシップ、ナショナリズム、大学、都市空間の形成といったものとなるでしょうか。私たちがいま置かれている現在を意識せずには競むことができないものばかりであり、また、時を経てあらためて違った読み方ができる楽しみをもつた力作ばかりです。ご検討ください。

◆史学研究会ホームページ・アドレス  
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/shr/index.html>

第IV部「高度成長と現代の都市空間」では、昭和三〇年代以降、経済復興とともに都市化が再び急速になった時期に顕在化した二つの問題を取り上げている。一つは、未整備地の無断・無許可使用によるバラック居住の集積地、いわゆるバラック／スラングで無秩序開発の進むスプロール地帯の発生である。前者は、同和地区を中心とする住宅改良や住環境整備の実施により解決が図られ、後者は、さまざまなもののが図られた。

以上のようないくつかの近現代期における京阪神地域の都市空間形成の様相が、一〇の章および一六の特論を通して、さまざまな事例や写真が状況を想起する手助けをしている。こうした論述によって、都市形成を規定するメカニズムやプロセスだけでなく、都市社会のさまざまな集団、とりわけ下層にあってともすれば犠牲になりがちな人々の実態についても理解を深めることができる。

本番に対し、読者への配慮をさらに望む

点がないわけではない。大半の地図が十分に鮮明とは言い難い。スキヤナーによるデ

ジタルデータを用いた地図が多く、解像度が低いため、トーンが淡く、描線が不明瞭である。空間バターンの描写として読者へのインパクトが弱いだけでなく、街区や地区名など、読解そのものが困難なものがある。また、凡例が図示されず、注記による説明にとどまる図、縮尺と方位を欠く図もある。読圖術が主題であると讀者たちの意が十分にくみ取れない。また、本文中で（）内に引用文献を示しているが、関連する文献のリストが文末に挙げられていれば、読者の手引きとなつたと思う。なお、スペルミス、用語の不統一等が散見されるのも惜しまれる。

本番の特質は、都市周縁のインナーリングの魅力を前面に出した近現代・都市空間論にある。都市を形作るさまざまな要素、旧来のものと新奇なもの、光と影、表と裏、調和と対立、これらすべてが共生し混交する地として、インナーリングに焦点を当て、その再興を目指している点に、大阪の街を徹底的に歩き込んだ三人の著者の個性と愛着が如実に表れている。本番に刺激されて、街歩きに出かけたくなる読者、あるいは都市の魅力を再認識する読者は少なくなる

史學雑誌（史學會（東京大学文部内））  
一九〇九年三月二十五日印刷 定価一・二〇〇円  
史林 第九一卷第一号（通巻第四七四号）  
九州国際大学 法学論集（九州国際大学法  
學會）一五九  
日本歴史（日本歴史学編集）七二六  
CHRONOSクロノス（京都橘女子大学女  
性歴史文化研究所）二九

八

史學雑誌（史學會（東京大学文部内））  
一九〇九年三月二十五日印刷 定価一・二〇〇円  
史林 第九一卷第一号（通巻第四七四号）  
（京都橘女子大学京都大學大学院文学研究科内  
電話（075）753-1778  
FAX（075）753-1778  
発行人 史學研究会  
報知京都 010-901-1555  
理事長 藤井謙治  
京都橘女子大学  
印刷所 中村印刷株式会社  
（京都市南区上高野森田一九